

水牛通信

VOL.6 NO.2
毎月1回・10日発行
定価200円

人はたがやす 水牛はたがやす 稲は音もなく育つ

世仁下乃一座のこと

津野海太郎

31

夕陽のメリーゴーランド

世仁下乃一座 岡安伸治

6

水牛のページ

5

のれん——ビゲンCで染めなおしたイホーテの赤旗

江原光太

2

のれん——ビゲンCで染めなおしたイホーテの赤旗 江原光太

三里塚に瓢鮎亭があるなら
植民地北海道のサツ・ポロ・ペツに
猪呆亭があってもいい訳だ。
おかしくはない。

さて、そこで旗揚げである。

『馬車の出発の歌』の一節を書きこんだ赤旗が
どこかに押しこんである筈だ。

マジックペンの、へたくそな文字より
あの赤さが気にくわなくて
御蔵にしまったのだ。

さて、そこで旗

あんなに鮮やかな赤はにせものである。

なんにも鬨っていない証拠である。
流された血は黒いのだ。

ロシアでもスペインでも中国でも
キューバでもベトナムでも朝鮮でも
タイでもフィリピンでも、どこでも。

ドライフラワ―の薔薇のように
殺された人間の血は黒くみえる。
軽薄な赤色ではないのだ。

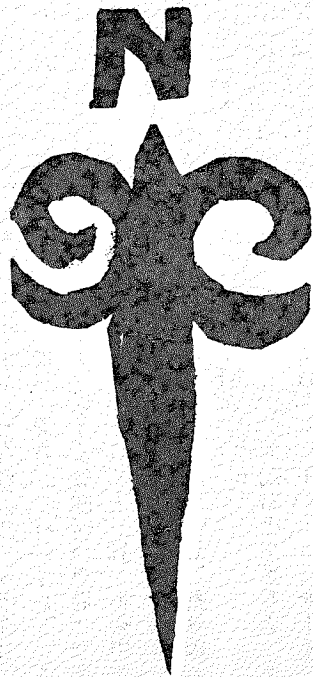
ひっぱりだした赤旗を
ビゲンCの液体で染めなおした。

この白髪染めの小瓶は
女房の使い残しの、いわば形見である。
念のためパイロットの製図用インクを五、六滴
ほどよく染まった。

洗って乾かした赤旗に

これもへたくそな文字で「猪呆亭」と墨書し
台所と居間の境にぶらさげた。

もう十年も前、上六あたりの焼鳥屋でひらかれた
川崎彰彦の課外教室で詩の朗読をしたばかりに
大阪文学学校の生徒が授与してくれた。



カットは砂沢ビッキ

キユーバ革命記念のメダルを縫いつけて、きょうから おれはイホーテである。猪武者とはいいながら老いぼれの落武者。現代のドン・キホーテであつてもいい。この寓居を猪呆亭と名づける。果敢なる戦士の家となるであらう。

さて『なにをなすべきか?』
ガリ版の「猪呆亭通信」発刊はもちろんだ。いっさいの仕事を中心に集中する。おれの砦として。

だが あわてることはない。
ささやかな旗揚げを記念して
まずは泡盛で乾杯と
できたての のれんをくぐったのである。

(1983・12・8)

- ＊前田俊彦老の号であり、砦の名称。
- ＊札幌。アイヌ語で「乾いた大きな川」の意。
- ＊小熊秀雄の詩(一九八五年) 三三五
- ＊レーニン政治論文のひとつ。



一月二日、仕事始め。今年も又、山谷の玉姫公園へ、越冬コンサートに出演する。水牛ももうここではだいぶなじみになった。去年の夏まつりでもうたった同じものを約三十分。

「国境の町」「好きになった人」「美恵の夢は夜ひらく」「ワルシヤワ労働歌」「水牛楽団のうた」等々。今年は例年より帰郷できずに、山谷で越冬する人が非常に多くてきびしいという話だった。一月九日、渋谷のユーロ・スペースで水牛楽団の第四作目のカセット・テープの録音をした。親しい友人十数人

に参加してもらう。四角い部屋の中、人の声や拍手などの音がいっしょにテープに入るはずだったのだが、やっぱり録音するとなると、みんなごちなくなつたみたいだった。三時から始めて、二時間位でと思っていたのだがいく度かやり直しがあつて、終つたのが七時頃。何度も同じ歌を聞かされたり拍手をさせられたり、参加して下さつたみなさん、本当におつかれさまでした。

なお、このカセット・テープは目下編集。二月末日頃に発売予定。定価二千三百円。収められた曲目は「夜這いの曲(アウ合奏)」「しずくの曲(同上)」「祖母のうた」「最後のノート」「だるまさん千字文」「水牛のように」「水牛楽団のうた」「ワルシヤワ労働歌」「花巻農学校精神歌」「パレスチナの子どもの神さまへののがみ」「フジムラ・ストア」「ボクハソソケイスル」「都市」。タイトルは「フジムラ・ストア」。

水牛はこのあと、一月二十一日に定時制南葛飾高校で、体育館落成のこけらおとしコンサートによばれている。さらに二十四日からは、バンコックでひらかれるユニセフ・コンサートによばれて行く。共演は小室等さん、カラワン楽団ら。

三月三日(土)、四日(日)は、渋谷のユーロ・スペースで今年はじめてのコンサート。今回は昨年十二月、神奈川県民ホールでの「高橋悠治の世界」で共演した如月小春さんといっしょで、その時の作品「高い塔の歌」を中心に、またこれまでとはちがったコンサートを企画している。開演は三日が七時、四日二時と七時の二回。出演は水牛楽団のほか如月小春さんとその仲間たち。入場料は二千円。

なお、二月一日、ぼくらは無事タイから帰ってきた。(これは最新ニュース！)

(福山敦夫)

夕陽のメリーゴーランド

世仁下乃一座

岡安伸治

登場人物

高官(自衛官)

ドバト

軍用ヘリコプター

佐藤(ポンプ車のオペレーター)

河田(ミキサー運手)

現場監督

八重(佐藤の恋人)

先手(佐藤の先輩)

松本(土方)

他 土方① 土方② 黒衣達

の三者が登場。コミックに踊り去る。

ミキサー車のドラムの中、ポンプ車のそれぞれの
凶面が順次入る。

現場監督 これはミキサー車。この建設現場でみかけるコンクリート・ミキサー車は大手のセメント会社、例えば小野田セメント、三菱セメント、宇部セメント、住友セメント、アサノセメント等の様な大手のセメント会社の下請け運送会社のもので。そしてその運送会社の下請け、孫請けの運送会社が車を持ち込んでいるわけです。当然のことながら上から、親会社から順次ピンハネするわけです。程仕事もきつく低賃金、保証等も劣悪、程度が落ちるわけです。まあ、ここいらのことはここにいる観客の皆様方

メリーゴーランドの音楽と共にドバト、高官ヘリ

が世間一般の常識としてお分りいただけると思います。つまり何々セメント会社というのがなんとかコンクリート株式会社という販売会社を持って、この販売会社が何々運輸という運送会社を持ってというそれぞれが、全部利潤を追求する仕組みになっているわけです。このドラムの中は、このような二枚の厚い鉄の板がラセン状に取り付いておりました、この回転でジャリや水、セメントをこね回して固まらせず御客様へお届けするという事です。そして反転させますと、この板の上をずると生コンが出てくるんですね。大体五、六トンぐらいのものをガラガラかき回すので、時間をいつまでもかけるとその熱で水が蒸発してダラムみたいな固まってしまう場合もあります。それとも一つ、このポンプ車ですが、この会社の数は都市だけで大体百五十ぐらいあるだろうといわれておりまして、正式には打設業という職種です。打設とはクイを打つ。生コンを地面深く流し込んでビルを支えるクイですね。設備の設を組み合わせたものの様ですが、大体百五十ぐらい。これもこの不況の折から過当競争激しく、ダンピングにつぐダンピングだそうです。このポンプ屋さんに対して支払われる金額の基準はポンプを送り込んだ量、例えば一リウベ、つまり一メートル掛ける一メートル、一メートル四方のマスに量に対して十円だとか計算されるわけで、今は九百円ぐらい

だそうです。会社が現場からどんなに離れていようと関係なし、その量が基準になるわけです。小さな会社で五、六台ぐらい抱えてやっている、土方仕事の一つだといってしまうばすむようなものです。ですから賃金も日給月給、朝からいうちから会社の薄汚ない物置きだか駐車場だか車庫だか分らないところを飛び出て現場へ向かい、土方達が集まって現場監督が来て、生コンのミキサーが着くまでパイプをつないだりの段取りをします。夕方作業終了の後はパイプを外し、水で車やパイプに付いた生コンを洗い流し、そのパイプをポンプ車に積み込んで暗い道を引き上げるんです。このパイプはポンプの力によって送り込まれる生コンを通すのですが、この長さですとか、建物の高さの具合、十階十五階二十階、このインターバルによって圧力で送り込む。この圧力の調整が非常に大事になります。この操作をするのを通常オペレーターといっています。

(開幕)

車のバックブザー音が入り、現場作業音がそれに加わる。オペレーターは「バック・オーライ」という合図の笛を吹きながら現われる。車を停めて歯止めをかける。運転手が現われる。先手が太いホースと共に

位置に付く。ここで労働現場の模範作業が行なわれる。(ここで作業は世仁下乃一座(ヨニゲノイチザ)にはあるまじきほどの作業規律、動作、態度の潔癖さが要求される。もちろん安全靴に作業着、上下揃い、アイロンがかけてあるもの。その上、この労働者は労働に対する誇りと自信に満ちあふれ、その瞳は少女漫画のヒロインのようにひかり輝いているのだ。あくまでも全体の雰囲気は清潔の一言。)

現場監督

彼です。彼がポンプ車のオペレーターさん。そしてこちらの方がミキサー車の運転手さん。そしてそのパイプの先にゴムのホースがついていて、これを操作しながら流し込むのを先手さんといっています。先手さんとオペさんのやりとりはホースに取付けてあるブザーで連絡合います。

ブザーが二度鳴る。運転手がステップで攪拌側から排出側にレバーを操作して、ミキサーのドラムを反転させる。ポンプ車の後部、ホッパー(生コン取入口)のそばにある操作パネル(ポンプで生コンを圧送する為の操作板)の前に立つオペレーターがスイッチを入れる。ポンプが作動を始めた。先手が、送ら

さんだ。運転手が去る。歯止めを片づけるオペ。現場監督を残して全員が消えた。

現場監督 どんな仕事でもそうですが、コンビネーションが大事、コミュニケーション、意疎通が大事なことはないまでもありません。私共のように大手の建設会社です、清水建設さん、大成建設さん同様、仕事の手順を電話一本で下請けに段取り、下請けがどうの孫請けをどう使おうがどんな人種をよこそうが、仕様書に決められたことを決められたようにやってくれさえすれば建物はできるわけですが、それぞれがそれなりに儲けるってわけですね。まず、現場の流し込みの準備ができる。その次の日、ポンプ屋も着いている。段取りもできてる。手順通りコンクリート会社に連絡をとっておけば、ミキサー車が路上で生アクビしながら待機していることはないわけですね。もちろんその日は晴れていなければならない。(去る)

正面に北極を中心とした世界地図が描かれている透明なプラスチック板が下りてくる。そして青く米戦略空軍(SAC)の主要指揮通信網が描かれ、赤色でフェイルセーフラインが入っている。隅の方になぜか丸秘のスタンプが大きく押してある。

れて来る生コンをゴムホースの先に巻きつけたロープを使い、抱えるように誘導して流し込む。ブザーが一度鳴る。オペがスイッチを切るとうなりが停まった。片手を上げてストップという合図をミキサー運転手にする。ブザーが三度鳴る。オペが小指を示してスイッチを入れる。運転手が操作レバーを押しやる。ドラムはゆっくり回転し始める。ポンプのうなりもゆっくり。しばらくするとブザーが一度鳴る。先の要領で停止。そして二度ブザーが鳴ると再びポンプがうなりをあげた。手を入れるの合図をすると、運転手はポンプのうなりに合わせるかの様にドラムの回転を速めた。少しして、もう生コンが無くなったらしい。シュート(ミキサー車の生コンが排出され流れる所)をのぞいていた運転手がさらにドラムの回転を速めた。オペがポンプを止めて、それに合わせてドラムを一旦停めてから反転(攪拌)の方へ切り替えた。メインシュートに残った生コンを竹ぼうきで掃き取るオペ。そしてシュートをポンプ車のホッパーから外して車の方へ押しやる。水で洗い流す。運転席の方へ去った運転手が小さな紙パサミに伝票をばさんで持って来る。オペはそれにサインして一枚を抜き取り、ポンプ車の伝票パサミには

高官が手にポップコーンを持って現われる。それを撤くと、あのどこでも見かけるドバトが一羽、バタバタと舞い降りて来た。(高官の衣装は誇張され、ドバトの動きは衣装においてもユニークで、かつオリジナリティで観客を充分納得させなければならない)

高官 確かに芝居をやる役者は馬鹿だよ。馬鹿です。馬鹿馬鹿馬鹿、役があるからっていわれればもみ手の一つもして、のこのこ舞台上上がる。そして何かすごい芸術的なことをやってるつもりになる。これが自分で説明のつかない時はなおさら、これはすごい事をやってるなんて自己暗示かけたりして……(じつとドバトを見てた)この服着せられて、ト書きにはこのドバトを相手にべらべらしゃべることになってる。作者の間違いかプリントミスかもしれないの。(手にした台本を投げつけた。マーチが小さく力強く聞こえてくる)ああと、忘れてた。もう一つ、アメリカ軍のヘリコプター。今これは日本のこの軍事通信基地をつかってタッチ・アンド・ゴードの訓練をしております。タッチ・アンド・ゴードというのは、航空母艦から発進したり、その小さな滑走路を離着陸する訓練であります。(ここでヘリの一踊りあつて去った。もちろんこのヘリも高官やドバトに負けない衣裳と動きが必要とされる)このタッチ

・アンド・ゴアの訓練は敵の妨害電波を避ける為にこの基地なら基地の一定の外に広がるエリアから内側では無線は切ることになっているんです。つまり訓練用にもサーフラインがある。あれっ、ドバトは……（エサが無くなったドバトが行ってしまった。同時にプラスチック板も消えた。あわててポップコーンをまいた。舞い戻るドバト。プラスチック板も戻る）ほらポップコーンだ。ポップコーン……。馬鹿にしやがって。（ドバトの目のいやらしさ）この工事中の建物は納期は二ヶ月後に控えて、急ピッチで工事が行なわれています。現在建築中のこの通信施設が完成すれば、この青く記されている通信網、ジャイアント・トック・ステーション。つまりSAC、米戦略空軍の主要指揮通信網の拡充強化がなされるわけです。トルコのインシルリクからイギリス、グリーンランド、アメリカのアンドリウースそしてオフアンのSAC司令部、そしてアラスカ、ハワイ、日本の横田、沖繩、グアム、フィリピンとつながっているこの青い線です。この赤い方の線はフェイルセーフ・ライン、つまり、核戦略飛行機B52が核攻撃に向けて飛行を続け、この地点で攻撃か否かの最終指示を受けるわけです。この後は、敵の電波妨害を避ける為、無線が切られます。自動的に決められた攻撃目標へ突込んでいきます。この最終指示を与える為の通信施設がこのジャイアント・ト

施設を間に合わせろっていうんだ。つくつちまえいうんだよ、この俺に。

ドバト 玉子は大抵二個産んで、統計をとるとオスメス、一対一だっていうんだ。これが不思議と。

高官は耐え切れず壁に頭を打ちつけた。

高官 さあ、どうもこいつもケツに火が付いたみたいに働け。工事を進めろ！

高官 ポップコーンの袋をふくらませて叩き割った。バタバタと飛び散るドバト。消えるプラスチック板。そして彼も去った。ドコドコ、ドンドンという音が聞こえてくる。それは数人の土方が木槌で板を叩いている音だと分る。（ここからは、あの潔癖さはすてがない。汚れたよれよれの上下不揃い作業着、体臭がばんばんしている。あくまで猥雑の一言）
少し離れた所に立つ現場監督、ハンドスピーカーを手に。

現場監督 もっと下の方から順序よく、叩いて。もっと隅の方から、やたら力んでも駄目だぞ、振動を与える様に。限

ク・ステーションです。（うなづくドバトの目がどうしても気になる）ドバトに何が分る……現在のC三、もしくはCの三乗、つまり軍事指揮のコマンド、統制のコントロール、通信コミュニケーション、三つのC体制。今までの体験では敵の核攻撃に対してアンテナや通信網が熱やなにかでポロポロになってその機能は十五分間しかもたない。最低これを六ヶ月間その施設が生き残れるようにしようという計画の一つであるわけです。十五分を六ヶ月。……聞け、ドバト、ドバト。今までの古い施設だとアンテナは裸のスイッチポン、核が爆発すると電磁パルスが起きて、つまり乱れだな。（抑えるが乱れる）お前を相手に演技している俺が乱れてしまう。この乱れだ、早い話が。神経が電気回路がいかれちゃうんだ。そうするとこの機能は十五分間しかもたないというわけだ。神経をやられちゃうんだ。天につばして面汚すみたいなものだ。分るか。分るか？（でも悲しいかな、自分で首を横に振っている）
ドバト ドバトっていうのはね、カワラバトが野性化したんだ。他にも伝書バトとかねあるけど。エサは穀類、マメとかトウモロコシとか……

高官 それで、上の奴らはこの俺にさ、三ヶ月後には、アメリカ軍との相互合同訓練があるからどうしてもこの通信の方からね……

土方①（作業をしつつ）分ってるっていうのに、いちいちうるせえなア。

土方② あ、エイズ野郎。ねちねち同じことを何度いや分るんだ。一度いえば分るんだってのに。

現場監督 まったく、どうもこいつも土方めら。しっかりやれよ。生コンの菓ができて、空気のアワでコンクリート面がアバタになっちゃうぞ。（去る）

土方① 待った待った待った。ちよつと待ってよ！ 漏れた！

土方② おーい、ストップ！ 生コン停めて生コン停めて、待った。パンクするぞ！

先手 あいよ。（プザーボタンを引き寄せ押した）

プザー音がする。土方①、ボルトを締めつける。土方②、ぐったりとして手を休め、タバコに火をつけた。先手がホースを放り出し板に腰掛け、汗をぬぐった。作業で気がつかなくなったらしい。側をヘリコプターが通り過ぎて行く。土方②と先手がばんやり見上げた。

土方① 打設屋さんよ。ポンプ屋さん！

先手 あん……。

土方① 駄目だよ、あの若いのじや、オペレーターはポンプ屋の顔なんだからよ。

先手 わかってるよ。

土方① 代わってあんたがやれないのかよ。

先手 先手は？

土方② ポンプ作業の相乗りが二人だなんてとこないよ。

どこでも最低三人が常識だよな。

先手 うちの会社に常識だとか股引きなんてあるかよ。出すもの出さなきゃ、腕のいいオベは逃げるよ。俺がここから逃げてえくらいだからな。

土方① 早かったり遅かったり、練り具合に合わせて送ってくれよ。時間ばかりくっつけてしょうがねえよ。

先手 悪い悪い！ 文句あるなら監督に言つて。

土方① 頼むぜ。

土方② やつちやおうぜ。いいよ。

先手 はあ——（ブザーボタンを4回押した）

ブザーが三回鳴る。再び鳴る。先手、土方①②作業しつづける。ヘリがまたもや通り過ぎた。別のエリアの佐藤は、ズボンの前チャックをしめながら振り返ると、三分の一程中身の残っているコーラのホー

八重 起きて、ねえ……。

先手 起きろ佐藤。

八重 お水。

先手 おい。……駄目だこりや。

八重 ライムで飲むときくね。もともと私なんかお酒強くないのよね。グラグラ、ラア——。

先手 飲む。八重ちゃん、佐藤にはもったいない。あんたの好い女だから一人のものになっちゃだめ。女はね、何人も何人も知って女らしくなるんだから。いや本当だよ。

八重 うまいこと言っちゃって、そうやって誰でも口説くんでしょ。

先手 俺はいつもまじよ、まじ。あれっ？ 週刊誌読んでないの意外だね。

八重 嘘ばっかり……

先手 そういう八重ちゃんがまたいい。本当だよ。（八重の手を取って引き寄せた）

八重 わあ——、やらしいね。そういうのっていけないんだぞ。

先手 よく寝てるって、起きないから大丈夫だって……

八重 ずるいなあ……もう……

突然音楽が入り、先手はズボンを八重はスカート脱

ムサイズを口に一口飲んでうがいして飲み込み、そして、ピンを放り投げた。現場作業音が入りBGM交差して、佐藤は作業着のままウォークマンタイプのヘッドホンを耳にあてて、膝を抱え込みしやがんでいる。大きく目を見開いて一点を凝視したままで身をかがしている。

先手が水洗トイレの水流しの為の瀬戸物製の取手を鎖のついたまま手にぶらぶらさせて登場、まるで佐藤が酔いつぶれて横たわっているがごとく対応する。

先手 オンボロアパートの管理人の婆さんにまた怒鳴られる。ヒヤハツハツ、チョヤー（ぬんちやくの真似）チャヤー（回し蹴りも決まらずひっくり返る）。アハハ……取れちゃった。トイレ、トイレ、取れちゃったよ。佐藤起きろ、起きろっていうんだよ。オペレーターの佐藤君起きて下さい。こんなもんで酔っぱらっちゃ男で、ビッグマンになれないのだ。トイレのブラブラ、チンブラリン。

八重 はい、お水。（コップの水を手にして登場）グラグラしちゃう。あんた、お水持って来たよ。起きて……

先手 いい、いい、こうなったらこいつ駄目なんだ。全然駄目。飲む……

ぐと官能的に踊り始めた。良きところにて黒衣が出て二人を黒幕で隠す。そこには「十八歳未満、御断り。但し、八重ちゃん十七歳」と書いてある。幕から満足気に顔を出し、去る先手。

幕前のマイム「セックスシヨップ」

女が人形のように歩いて幕前に立った。男が現われ女のそばに立つてコインを入れた。女はニッコリ笑い上着を脱ぐ、再度コインを入れるとスカートも脱いだ。喜んで男はコインをもう一枚入れた。女動かず。コインを何枚も追加した。今度は女はニッコリすると、いきなり男を張り飛ばした。

幕が外されると、佐藤は依然としてそのまま、八重の衣装が変わり、涙をとめどなく流しながらうどんを食べている。

八重 グラムは行けば青い海でしょ。青い空でしょ。ヤシの実が浜辺にあつてこれぐらいの芽が出てさ。サンゴの海をカヌーなんか漕いじやってさ。私をうしたらヤマモト・カンサイかなんかの、こんな凄いきニ着ちやってさ。だつてトップレスじゃあんた恥かしいでしょ。こんなすさまじい奴。（腰に手で示した）

佐藤 ……

八重 あんた、あたしのお尻が入らないと思ってるでしょ。入るよ、入れちやうよあたし。そういうところ行けば何だっでさちやうよ。日本人だから。ジョーズみたいなサメだっで平気だよ。目に指突っ込んでやってさ、ガアッて開いた口の中で百円ライターつけて、ノドチンコ焼いちやうよ。大きなエイが泳いでたら、知ってるエイって？ こうやって泳いでる奴。あたしさ、シッポつかんでビタビタ叩きつけて、カラカラに乾して団扇にして北海盆唄踊っちゃうよ。やっちやうよ。日本人だもんね。……北海盆唄嫌い？

佐藤 ……

八重 食べなよ……ねえ、行こう思いきって……

佐藤 ……（下唇を噛んだ）

八重 二人でさ、あたし金のこともなんとかする。グアムだとかハワイだとか。やり直すの。きちんとする……

佐藤 ……

八重 ねえ、返事ぐらいしてくれたっていいじゃないよ。

佐藤 ……

八重 いや？ こんな私いや？ いやでもいいよ。いやになってもいいよ。かまわないよ。

佐藤 いや……

八重 えっ？ 何か言った、今、何か言った？

佐藤 いや……

現われた。

八重 食べて、あたしが作ったんだから。

佐藤 ……

八重 私がきちつとするっていつてるでしょ。冷蔵庫に入れといてよ。……入れといて！

佐藤 もういいよ。

八重 良くないよ。入れといて。

佐藤 ……

八重 そこいらに捨てちややだよ。私の赤ちゃんんだから。捨てられたら野良犬や猫に食べられちやうよ。カラスに目突っつかれちやうよ。埋めてくれないとやだからね。捨てちややだから。……おかわりしよ。(去る)

現場の音が入ってくる。ヘリの通りすぎる音。

●来る。
松本が足を引きずるようにして、ねこ車を押して

松本 兄ちゃん、生コン一杯貰って言われてさ……

佐藤 今、無いよ。(そつと包みを隠した。)

松本 もう、おっつけ来るよな？

佐藤 ……

八重 何か言って、何か言いなよ。……黙ってられるとどうしていいか分らない……

佐藤 きちつとするって……

八重 冷蔵庫の赤ちゃん、きちんとする……埋めるとか……ゴミみたいにして捨てて犬にかじられたらやだもん……食べなよ、おうどん。

佐藤 ……

八重 何か言って……どうして食べないの、お腹すいてると気がめいるでしょう。食べな、楽しいこと考えよう……どうして食べてくれないの。

佐藤 ちきしょう……

八重 いいよ、気にしなくて、仕方ないよ、あんたに話そうと思っただけど、いつの間にか居なくなっちゃうんだもん。だから私どうしていいか分らなくて、赤ちゃんいると働けないもんね。仕方ないんだよね。

佐藤 くそっ……（立ち上り、手にした井を投げつけた。いったん去る。）

八重 食べて。会えたんだもん、いいじゃない。うどん好きでしょ、鳥肉ないけど卵入れてあるから、ねえ、食べな。楽しい事考えよう。グアムかハワイ行ってみよう。

佐藤が、ビニール袋に入ってる新聞紙の包を持って

松本 外はえらく騒いでるじゃねえか……（二服つけた）

佐藤 基地反対のデモだろ。

松本 らしいな……あれで金なんのかな、ハハハ……

佐藤 じいさん。

松本 うん？

佐藤 何んで生きてんの。足、引きずって生きててもしようがないじゃないの……

松本 ……

佐藤 ばあさん居るの、みつともなくないかい？ みじめさらして、みつともないと思わない？

松本 あんた何年生れだ？

佐藤 何んだよ……

松本 お前、何年生れだ？

佐藤 それがどうしたよ。

松本 二十か？

佐藤 うるせえな……

松本 十八か？

佐藤 十九だ。

松本 俺らが前ぐらいの時はみんな特攻隊で突込んでな。そいでみんな……

佐藤 勝手に死んだ奴らのこと知るか。うるせえ……

松本 このミキサの中へ叩き込んで挽き肉みたいになり

たいたか。

佐藤 棺桶でもかっいでろ。

松本 (思わずシャベルを手にした。)お前な、十九かそこらでてかい口聞くなよ。お前だつてな、赤ん坊の時があつたんだ。

佐藤 なんだよ、うるせえな。

松本 お前だつてな、親になるんだ。

佐藤 (一瞬、隠した包に気がいった)俺がどうかしたかよ？

松本 いかこうなるんだ。年とるんだ年を。

佐藤 だからどうなるつてんだよ？

松本 年をとるんだ、俺みたくに。

佐藤 お前みたいにおいぼれるかよ。

松本 何……

佐藤 ……

松本 順送りだ。

佐藤 何んだつて？

松本 順送りの申し送りだつて言うんだよ。

佐藤 何が？

松本 年とれば分るよ。

佐藤 年とらねえよ。

松本 ぐるぐる回りが……

佐藤 俺は年とらねえの！

—

現場監督 三時のポンプ打ちが今何時だと思つてんだ。五時だ五時。その間、作業に穴あいてんだよ。あと一台分ぐ

らいのわずかつばかしの為に……

河田 でも、しょうがないでしょ、基地回りのデモ隊と機動隊で通れないんだから。他の道路も迂回した車に巻き込まれて動けなかつたんだから。

現場監督 二時間だよ。他のミキサー車はちゃんと時間通りに着いてるぞ。終了車が遅れてどうするんだ。十六ゲートへ回ればいいだろ。薄暗くなつてきて作業できなくなるぞ。

河田 どこも駄目だったの。

現場監督 おおい、作業開始だ！ 松に一杯やつてくれ。

(どなりながら去った) 作業開始……

松本 連ちゃん、景気はどうだい。

河田 まあね……

松本 少しでいいから、たんと入れたつて体にきついでいただけからよ。

排出するが固まってどつと出てしまう。一輪車を持って松本がよろけた。(黒衣が一輪車に乗りこんで
もいいな)

音楽が入り、マイム、黒衣による蝶々が舞う。佐藤がつかまえる。羽根や足を一つずつ引きちぎる。そして捨てた。松本がその蝶を拾い、羽根や足を一つずつ引きちぎる。そして捨てた。松本がその蝶を拾い、羽根や足を一つずつ付けた。元気になって蝶は飛んだ。佐藤が手で叩いて殺した。現場音が戻り、バックブザーが鳴っている。佐藤が、脱いでいた上着をだるそうに着ると、短くなったタバコをポンプのホッパに投げ込んで、車の誘導を始めた。

佐藤 オーライ、オーライ、ストップ！ (歯止めをして、シュートを車からポンプ車のホッパへ段取る。)

現場監督が走り出て、いったん消えて河田と共に登場。

現場監督 遅いんだよ。何やつてんだお宅の会社、無線が付いてんだろ、遅れるなら遅れるつて連絡とれよ、プラントと……

河田 入らないんだ無線が、ガーガーピーピーいつてよ。

現場監督 故障か？

河田 ここは通信基地だからじゃねえか、妨害の強い電波かなんかじゃねえかな。

—

河田 悪い悪い。

松本 あらら、よいしょ。

河田 大丈夫かよ。

松本 オ、オリンピックの年によ、品川の化学工場が爆発してよ、消防士助けたんだけど足この通りだよ。よいしょと…… (押して行くが、ほんのわずかな段を勢いをつけて乗り越えようとするが駄目で、三度目に倒れてしまう) ハハハ……まったく、しょうがねえな…… (空になった一輪車を移動させてから少しずつスコップで積み直した) よいしょ…… (去る)

河田 固まったかな……

河田、いったん、攪拌側に思いきりよく回転を上げる。佐藤、上へ向かって大きく両手で輪を作り、合図を送る。佐藤がポンプを作動させた。河田、排出側へとドラムを回転させる。ポンプで圧送が開始された。ピストンのうなる音。

佐藤 停めて、ストップ！ (竹ぼうきでシュートの生コンをホッパーへ押し流しながら) おつそろしく固くなつてるじゃん。流れねえよ、この野郎。……ゆっくり回して…… (シュートに足をかけて)

ドラムがゆっくり回転始めた。しかし生コンが固くなつて流れないのが佐藤の動きから明らかである。ブザーが一回、停めた。ドラムも停まり、ブザーが三回、佐藤はポンプのスイッチを入れてから小指を示した。ドラムが回転、竹ぼうきで押し入れる。

佐藤 全く固えな、固くてやってられねえよ。

河田 やつぱりな、二時間もかかっちゃな……ドラムの中の羽根が混ざる時の熱もすごいしな、水が蒸発すんだよ、やつぱり。

ブザーが二回ずつ、数度鳴る。

佐藤 うるせえな、分つてるよ、馬鹿が、イモッ！ 少し飲ませてよ。(コップの水を飲む草)

河田 悪いね、現場監督の指示がないと駄目なんだ。会社に言われてんだ。

佐藤 二時間待たせて固ませたの俺かよ。俺じゃないだろ。

河田 悪いな。

佐藤 じゃ、あんたやれよ、この筈で。やってみろよ、ど

れくらいのもんだか分るから。

河田 規則だよ。

佐藤 規則だからって俺困らせんのかよ。現場の人間の為にあるんだろ、規則は。

河田 ……

佐藤 大体、スランプ二十だろう。ここまで工場のプラントから荷積んで練りながら来る時間、計算に入れて現場で注文すんだろ。二時間遅れてスランプが狂うの当り前じゃん。

河田 だからさ……

ブザーが二回、数度。

佐藤 悪いけどやつこくしてやつこく。上で文句言ってるからよ。

河田 現場監督がやれって言え……

佐藤 監督の妾みたいなこと言わないでくれよ。どこの現場だってやつてんだから。いいじゃねえか、俺が言ってるんだから、オペレーターが言ってるんだから。どうすんのよ、竹筈で五十も六十回もやれつてかよ。

河田 ……

佐藤 よう！(水を飲む草をして)

止。ドラムも。現場監督が飛んで来た。

現場監督 おい！ スランプいくつの持ってきた？

河田 えっ……

現場監督 練り具合だよ。スランプいくつの持ってきたんだよ！(ホッパーを覗いている。)

河田 ……二十……

現場監督 これがスランプ二十かよ。伝票持って来いよ伝票。

河田、伝票を取って来る。

現場監督 早く上がりたくて、水勝手に入れたんだろ。

河田 いや……

現場監督 本当か。よう、佐藤とか言ったな、お前どうなんだ。(佐藤を睨む)

佐藤 ……(異様な程、無反応)

現場監督 本当だな。(河田、そして佐藤へ) ちよっと待つてろ、確かめてくるから、回すなよ！ 流し込むんじやねえぞ。(ブザーが二つ鳴る。両手を振った) 待つてろ、ストップだ。(去る)

河田 ちえ……だから……

佐藤 まだまだ、もっと景気よく入れてよ。

さらに河田はホッパーへ登り、水を入れる。ヘリが飛んでいる。ブザーが二度鳴る。

佐藤 (上の方へ怒鳴る) 待つてくれ！ 水飲ませてから！ インポ野郎……

かなり入った様だ。攪拌して少し出してみる。ポンプが回転し、佐藤はオーケーのサインを出し、ポンプがうなりをあげた。排出のドラムも順調に回っている。しばらくしてブザーが鳴った。停止。ドラムも順調に回っている。しばらくしてブザーが鳴った。停

佐藤 大丈夫だよ気にすんなよ。どうってことないよ。いちいち奴らの言うこと聞いて仕事になるかよ。大丈夫だよ。気にしない、給料分の仕事やってればいいの。余計な事は残業分。

ヘリが通りすぎた。監督が戻って来る。タバコを口にして、ウロついた。舞台袖に振り返り。

現場監督 何！連絡ついた。何んだって……（いったん去り、再び現われる。）お宅、河田っていうのか？

河田 ええ……

現場監督 会社のプラント、配送係に電話入れたら、数字に間違いはないとよ。

河田 ……

現場監督 どうすんだお前、勝手なことして……（手帳に黙って何か書き込んだ）持って帰れ。

河田 ええっ！

現場監督 ほれっ。（伝票を突っ返した）二度とうちの会社へ、出入り禁止だ。ナンバーと車番控えたから。いいな、すぐ持って帰れ。折り返しすぐ他の車出すようにプラントに言うから。よお！……（両手を上に向かって交差させた）

現場監督 当り前だろ、サインしたら使いもしないのに金払わなくちやならないんだよ。そんな馬鹿なことするかよ。帰れ帰れ、もう出入り禁止。

河田 困るんですよ、何んとかそこところ、何とかならないですか。

現場監督 （舞台袖に向かい）待機させとけそのまま。（河田に）何んともならない事したんだよ、お前が。本来ならお前とこの会社はこの建物そっくりやり直しの弁償させるところだ。すぐに俺が気が付いたからいいようなもの、他の建築屋と一緒にすんなよ。

河田 何んとか……

現場監督 他と違って自衛隊屋さんの仕事はうるさいの。ワッパ回しが言われた事、言われた通りにやるんだよ。分つたらもういいだろ、持って帰れ、一リウベ一萬ちよつとだから、五、六万も弁償して忘れろ。ごまかす事が出来る事と出来ない事があるの。（上に向かい大きく両手を振って交差させて去る）

河田 佐藤を見るが無反応、シュートを外し攪拌回転に。シュートの残生コンをシュートの先端にバケツ（オイル缶を使用）を下げてからウォータータンで洗い流した。そのバケツを手にしてステップを昇

河田、伝票持ってウロウロ。

現場監督 帰れよ、邪魔だ！

河田 監督さん、何んとか……

現場監督 何言ってるんだよ。

河田 勘弁して下さいよ。

現場監督 伝票もサインしないぞ。JISの工業規格外のもの使ったとばれたら全部やり直した。官庁がうるさい事ぐらい常識だろ。お役所、お役所相手の仕事なんだよ。納期ぎりぎりやってんだ。なあ、お前の勝手で働いてんじやないよ。ばれたらすべてやり直した。それよりこれぐらいで済んだのありがたく思え。

河田 何んとか……あんまり固いんで、この人に言われて……

現場監督 馬鹿野郎、監督は俺だよ、現場仕切ってる俺だ。ポンプのオペじゃないよ。責任者は俺、責任とらさるんのは俺、寝言いつてんじやないよ。

河田 時間くっちゃって……

現場監督 俺のせいだよ。ポンプのオペの言う事と俺の言う事とどっちなんだ。お前んとこの会社はそんな教育してんのか。現場の責任者は俺だ。俺の言う事聞かないで誰が動くんだよ勝手に。

河田 謝ります。サインももらわずに持って帰ったら……

り、ホッパーにあげようとして、中に落ちてしまう。

河田 あっ。（レバーでドラム停止）落つことしちゃったよ。（上半身を入れるが届かないらしい。さらに逆立ちするぐらいまでして、バケツを取り出す。すでに佐藤はそこに居ない。迷った末にもう一度頼んでみるか、くそったれ……（去る）

高官 ポップポップポップ（またはやポップコーンをまきながら登場）ほら、ポップコーンだ。出て来いドバト、出て来いよ。

プラスチックの板とドバトがまたもや……

高官 あなたと私の考え方の違いというのはこういうことだと思っんです。私は世界中が戦争に関連していると考え。あなたは日本だけが眠っていると考える。海峽封鎖をやるとかやらないとか、それで攻撃されるとかされないとか、かいうのは、私に言わせればナンセンス。核基地が無ければ攻撃されないというのも、私に言わせればナンセンス。日本はアメリカの所詮、捨石だ。例えばベトナムでの事を思えばいい。米兵が傷だらけになってバタバタ暴れる政府軍兵士を助けましたか？ 助けやしない。一番最初に自分

達米兵を救出、次にカイライの将校、そして一般の兵士は見殺し、ないしはベトコンに寝返らない為に射殺。日本では別だと考えたいですか？ 横田じや米軍の家族の避難訓練はしょっちゅうやられてる。ハワイやグアムへ。我々はどこへ逃げます。江の島が大島ですか？ それとも三宅島ですか？ ボボーン。缶ビールの空缶じやあるまいし、そんじよそこらの分別ゴミと一緒にされてたまりますか。奴らと我々とはどれだけ違う。金玉の数が多いのか、それとも女のあるこは天地逆さだとも言うんですか？ いつも決まった制度や条件を持ち出す。この制度や決りは一体誰のものです？ 奴らが奴ら自身の為に奴らの手によって作られたものですよ。法律や規則なんてものは、いつも権力者の為に作られた。もしくは言いがれ。ならば我々の手で我々の為の我々のものを作り出すべきでしょ。叩くか叩かれるか、叩かれるのが嫌なら先に叩くべきです。

ドバト ハトの帰巢本能ですけどね。

高官 えっ？

ドバト ハトのね、巢に戻るでしょう。あの帰巢本能のことですけどね。

高官 ええ……

ドバト なぜだと思えます。

高官 えっ？

爆ぐらいて世界はゆるぎもしないかもしれない。ようは要ポイント。何がネックであるかといえば、現場が手足とすれば、その手足を動かす脳、ないしは神経にメスを入れればいいわけです。相手は半身不随、これは簡単に叩けます。つまり、この通信施設は神経機能の一部なんです。ここは。あなたの帰巢本能が（頭を示して）ここにあるとすれば、ここを狙うべきなんだ。手足はここに從ってる。ここ（自分の立つ所）は、戦略の上の神経が集まっているところなんだ。ここは相手が一番狙う所だと考えるのが当然なんだ。ミサイルはまっ先にここに落ちる。相手の核ミサイルはこの通信施設に落ちるんだ、ここに。

ドバト そうなんだ。私らハトはね、喧嘩になるとオオカミや他の動物なんかと違って喉笛みせて降参しても、ついついてついついつつき殺すんだよね。普通、喉笛見せたら勝負は決まったんだから喧嘩はおしまい。それが種、オオカミならオオカミの種族を残す為の原則なんだ。

高官 だからね、だからね。私が何度も言うように、この訓練は必要なんだ。今の日本は非核三原則があるから、この原則は原則として、日本の外にあるアメリカさんの核弾頭を運び込み、ここで組み立てていつでも使えるようにする。敵の核ミサイルがここに向かったら、この上空で核を爆発させて敵のミサイルを落とす。その為のタッチアンドゴ

ドバト 頭の中に磁石があるって言う人もいますし、地球の磁場に反応するんでしょうね。太陽を見て自分の位置を知っている人もいますしね。

高官 えっ？

ドバト 試しにハトをね。目隠しして遠くへ運んでもきちつ戻って来れるし。太陽の出入りの角度をです、実験で明かりの角度を少しずつ変えたら狂った方向へ向かって飛んだっていうんです。狂ったというより、太陽の角度に対してハトの中で計算された方向へという意味で、狂った方向へ飛んじまうんですね。

高官 ハトの話は興味がないんだ。分かってんのか、俺の言っていることが。人間だって仕事が終わったり行き場が無くになると家へ帰る。

ドバト そういう事とは……

高官 あんただって私の話なんか分っちゃいない。でしょ？

ドバト （鳴いている）

高官 あらゆる作戦を立て、もしくは敵の行動を、世界中のわずかな状況の変化をリアルタイム、同時に情報を集中し、データ解析し、分析し、そしてそれを一時も待たずにアメリカ中枢で判断し、現場に指示を与える。一発の銃声から世界がひっくり返るかもしれない。もしくは一発の原

一の訓練は必要なんだ。（ヘリの音がしている）タッチアンドゴ、タッチアンドゴ、タッチアンドゴ、タッチアンドゴ。

ドバト （餌袋を見て）もう無いのかな……

高官 ポップコーンの方がそんなに大事か！ 今のここでそんなに大事なものが、ポップコーンが。

ドバト 同じ哺乳類を食い散らかしているのは人間だ。はじけるポップコーン以外に何の用がある、この俺に？ 俺はドバトだ。血統書なんか無いしよ。

高官 ……

ドバト いつも人間の勝手で押しつけるんだ。ノアの箱舟の時もそうだ。漂う箱舟から陸地恋しさにカラスを飛ばした。カラスは帰って来なかった。なぜだ？

高官 ……？

ドバト カラスは帰らなかったのさ、なぜだ？

高官 カラス？ カラス、カラス……（答に詰まる）

ドバト （わざとらしく面突き合わせて）ハハハ……そうだよ、やつが利巧なのさ、ずっと。今度はハトを離れた、ハトは帰って来たのさ、なぜだ？

高官 帰巢本能……

ドバト そうさ、帰巢本能さ、意味なんか無い。本能なんだ、自分でも分かっちゃいないのさ。しかももう一度離し

たらオリブの小枝をくわえて来たんだ。出来すぎだ、ハトに言わせれば巢を作る為だったんだ。陸地は近いって人間は喜んだ。人間は救われた、万歳。それでハトはい鳥というわけさ、シンボルさ。人間の知ったこっちゃないんだ。みる、そのユダヤの国では殺し合いだ。ヨーロッパの絵描きがシンボルマークに使ったんだ。俺に断りもな……餌はもう無いのか？（鳴いた）

高官 私のやっていることは本能じゃない。私の意志だ。あくまでも。AH—六四Aのヘリで核物質をこの基地まで運び、短時間で組み立てる。平時の訓練、実践的な訓練こそが全てだ。MWWU—I核専門部隊の緊急移動、全ゆる事態を想定して訓練を不断に休みなく、その日の為に。

ドバト （皮肉をこめて）人間だけの為に地球はあるんだ。高官 飛んできていいだろう、どこへでも。PALという核弾頭の信管は取り付けたらいいよ、やりやしないんだから……やりたくないけど。やりたくないなあ、本当はやりたくない。今この手で作るんだ。訓練はあくまでも実践的に即したかたちでなければ兵士の志気に影響を及ぼす。俺に言わせれば核と言ったところでたかが知れている。本物の核弾頭を扱ってこそ真剣に……

ドバト アジアやアフリカの貧乏人共は俺達を食ってる。高官 あなたは政治屋だ。政治でものを考え政治で判断す

あんた達はいつも責任から逃げ出せる手立てを考えている。いいか、銃を射つのは俺だ。誰が敵か判断するのは俺だ。俺は脳味噌を吹き飛ばされるのは性に合わないんだ。好きじゃないんだ。そうだと、ノアの箱舟だ。果てしなく漂う舟だ。船長はこの俺だ。大海原をどこまでも果てしなく漂うノアの箱舟。船長は俺だ。この俺なんだ！ タッチ・アンド・ゴー！

マーチが流れてくる。

ドバト そして俺は、オリブの枝を求めて飛び続ける。どこまでもどこまでも。イカロスの翼のように、ただ太陽の陽を求め、陽を背にうけて、いつまでもどこまでも。オリブの枝はどこだ。

ドバトが飛んだ。飛ぶドバトと旋回するヘリ。踊る。そして一瞬全体が停止した。

高官 何だ、あれは？ ハトだ。ハトの群が飛んでいる!?
ヘリコプターに基地に近づくなと言え、基地に近づかない様にヘリに伝えろ！

る。あるものが無かったり無いものがあつたり、白いものが黒かったり、表側が裏側にねじれたり。しかし私は軍人だ。軍人とは闘うものだ、守ることではない、攻めることだ。守りは負けだ。負ける為に私はいるんじゃない。勝つ為だ。勝つ事しか考えない、それが私だ。どこに嘘がある。あなたは私にピストルを、私の腰にピストルを下げてさせて、そしてこう言うんだ。射ってはいかん！ なぜ。ピストルは射つ為にある、射たないピストルなら腰に下げる必要などない。あんたは敵が時代によってくるくる変わるんだ。アメリカであつたりソビエトだつたり中国だつたり、時と共に動く。その度に俺はあつちを向いたりこつちを向いたり。そして待った、射てという一言を。あんたの気分であつちこつちへうろろうろ動かされるのさ、そのお天気がいいで。いつもこう言うんだ。いいのかい、先に銃を射つな、射たれてから弾をこめろというんだよ。射たれちゃった俺は血だらけに、のたうち回って口から血をだらだら流し、この血を震える手でこめろやうてぬぐいながら、震える手で血だらけの手で弾をこめるんだ。その時は俺の頭骸骨から敵の射った二発目の弾で脳味噌が吹き飛んでるんだ。それで初めてあんたは言うんだ。射て！ 射て！ 射て！ 射て！ 敵に負けるな。分かるんだ、その時、俺の敵が誰だつたのか。あんただよ。あんた。俺の敵はあんたなんだ。

ヘリ①、唄っている。

高官 基地のセーフラインを越えない前に連絡を入れる。近づくな！ 離れろ！ ヘリのジェットエンジンにハトが飛び込む、引き返せ！ ジェットエンジンにハトが飛び込む、近づくな！

ヘリ① ベトナムじゃ、ロケット弾の雨の中だつて突っ込んだ、心配するな。

高官 引き返せ、命令だ。

ヘリ① 始まった。命令だ命令だ命令だ。いざというとき戦場でそんなものが何になる。

高官 突っ込むな！

ヘリ① シャラップ。グウーク。タッチアンドゴアの訓練は電波妨害を避ける為にある地点から、セーフラインから無線は切ることになつてる。聞こえない。スイッチオフ。

高官 （片手で口をおさえた。その手をとろうともがく）

ヘリ① さあ、しゃべれよ、グウーク。スイッチオン。

高官 戻れ、基地へ突っ込むな、だめだ！

ヘリ① セーフラインは俺が決める。シャラップ、グウーク。スイッチオフ、オフ！

高官 （又もや口がふさがれた）

ドバトとヘリの空中戦。ヘリとドバトがぶつかり
合った……

ヘリ・ドバト あらっ、あらら！
高官 ああっ！

高官とヘリが去り、

ドバト この時、ゆっくりゆっくり羽根が一本一本、自分の皮膚からはぎ取られて、目の前を雪のように舞うのをぼんやり見ていた。そして、その吸い込まれたジェットエンジンの丸い口から外に目をやると、丸い空を通して下にミキサ車の停っているのが見えた。それはまるで腹ばかりぶよぶよしてずんぐりしたマンモスのようだった。コンクリート・マンモス。羽根が空へ空へ真赤な陽の中へ舞い散った。

ドバトが消えた。ターボジェットの吸気音。グシャグシャバサツという音と共に失速、落下して行く。

佐藤 あ！ヘリコプターが落ちる。

河田 えっ！ああ――

失速音

佐藤・河田 あっ、落っこっちゃった

爆発、炎上、バラバラという爆発物破片が飛ぶ、一瞬の間の後、二人共、そっちへどつと走り出した。エッサカホイサと「核弾頭」と書かれたのぼりを先頭に、ヘリとドバトが核弾頭をかついできた。核物質はバードケージ（鳥カゴ）と呼ばれる金属枠のコンテナがあつて、その中に消火器ぐらいの大きさで回りの枠で支えられている。
ヤッサカホイサとミキサ車のホップによじ登ったヘリの手にロープ、それで核弾頭を引っ張り上げ、他が押し上げる。わずかにホップの所にひっかかって中に落ちない様に仕込む。

高官 ヘリコプターが落っこつて核弾頭がなくなっちゃったよー！核弾頭がどこかへぶつとんじやったよー！

現場監督が走り抜ける。サイレンの音が聞こえる。

河田 あれっ、何かひっかかっちゃってるな。冗談じゃないよ、どうなっちゃってるんだ。（ホップによじ登り弾頭に触れる）あっちうち……（手袋をして取り出そうとして中へ落としてしまふ。ガラガラという音）いけねえ。また落っことしちゃった。

佐藤をひき連れて早足に戻る監督。

現場監督 おいおいおい、やばいぜ。基地の中で事故だとゴタついて当分出入りできなくなる。

佐藤 丁度助かったじゃないですか。

現場監督 何言ってるんだ、納期は納期だよ。あと一台分か……よし分かった。流し込め。このどさくさで都合いいや、流し込んだじゃえ。

佐藤 ええ？

現場監督 （河田に）おい、特別に今回だけ特別だ。受け取ってやるから伝票よこせ。

河田 そうですか、すいません。助かります。（伝票を差し出す）

現場監督 気をつけろよ、今度から。

河田 はい、すいません。

現場監督 すぐ休憩中止して作業開始だ。馬鹿面して事故

眺めてる奴らかき集める。急げ、納期一日遅ければ首が飛ぶぞ。（去る）

佐藤 勝手に首でもケツでも飛ばせ！おい、作業開始だつとよー 作業開始！（去る）

河田、あわててミキサ車のホッパーより上半身を入れるが、なかなか取れなくて下半身から中に入り込む。

河田 俺はミキサ車のドラムの中から明るい陽の中へ飛ぶ鳥を見たんだ。あかねの空へ飛ぶ鳥を。あれは確かにハトだった。嘘じゃない、ハトが飛んでいた。それとも幻か……（引込んだ）

松本がねこ車を押して現われる。相変わらずサイレンの音。佐藤が足早に戻る。ブザーが鳴っている。佐藤が両手で輪を作って。

佐藤 うるせえな、馬鹿野郎、うるせえつてんだよ。あれつ……どこ行つたんだあの野郎。じいさん、運転手どうした？

松本 俺は見張りじゃないから。

佐藤 かわいくないな……（隠してあつた例のビニール袋

の包みを取り出すと、ミキサのドラムへ投げ入れた。ポンプのスイッチを入れて「じゃ、いや、そのレバーを前の方に押し下げてよ。ミキサ、まわして。おたおたしないでやれよ。よう、つんばじい押しよレバー。」(ジエツト機の爆音が近くなる)お前聞こえないのかよ。

河田 (再び首を出す。手に例の包み) そうなんだ。やっぱりあれはハトだったんだ。確かにぐるぐる回って空へ空へ、どこまでも飛んでいった。空がやけに赤く染まっている。なあって思ってたんだ。

佐藤、松本の手をとってレバーに押しあて、ぐっと攪拌の方へ一気に回転をあげた。同時にジエツト機の爆音が通り過ぎて行った。一通り回転を上げて停止。排出の方へレバーを。

佐藤 そうしたらここで押えて、出せたらこうやって出すんだ。ストップしたらここへこうやるんだ。まわせ、まわせ、出せ、出せ！出せ！、いいぞ、じい。

二つブザーが鳴る。

佐藤 分かったよ、くそつたれのインポ野郎！(ポンプの

回転を上げる。うなるポンプ、回るドラム) 出せよ、もつと出せ。

一つブザーが鳴る。

佐藤 ストップ、停めろストップだ。(掛け寄り、レバーを抑える。ドラム停まる。上を見上げる) え？ 何んだよ、もつとか？……何、チェーンがどうした？ パイプテックを抑えてるチェーン？ 外れそう、どこ？……何？……俺がやったんだから大丈夫だよ。……分った、行くよ、すぐ行く。間抜け野郎！(ポンプを回転させて流し込ませて、ボックススレンチを手に見届け去る)

高官が走り出て

高官 (ソデに向って) おい！ それ持って何してる。……

ガイガー計測器もつてうろつくな、核はないんだここには、何事かと思われるだろうが、ガイガーカウンタをこっちへよこせ！(いったん去って、ガイガーカウンタを手に現われる。)

松本に気が付いて止まり、去ろうとして、その時、

まるで効果のミスの様にガイガーカウンタが鳴り出した。

薄暗くなりかけて、夕暮とサイレンと炎が混っている。

高官は啞然として、松本の方へ寄って行った。

高官 何やってんだ！

松本 えっ？……

高官 この非常事態に何やってんだ。

松本 いや。(ただ分らず首をふっている。しかしレバーをなぜか離さない)

高官 何やってんだ、ここで！

松本 ……

高官がゆっくり近づき流れ込む生コンを覗き込む。ガイガーカウンタが激しく反応する。

高官 停めろ、停めろ！

松本 ……(停めた)

高官 お前何やってんだ!?

しばらく高官は松本を睨みつけた。そのうちバスコン、バスコンという空送りの音がし出した。佐藤が

走り戻る。

佐藤 じい、何やってんだ。生コン出さないからポンプ空送りだろうが。出せこの野郎！(松本を突き飛ばして、レバーを操作して排出させた) ちきしょう、どいつもこいつも、いも野郎。こんな糞会社辞めてやる、今日限り。

高官 何やってんだ、ここで！

佐藤 見りや分るだろう、建物つくってんだよ。

高官 建物？

佐藤 あんたらの使う建物だよ。俺達の国家をつくってるんだ。国家だ。

高官 何を流してるんだ。

佐藤 うるせえな、見りや分るだろうが。コンクリートだよ、夕陽に赤い真赤、赤な生コンだ。文句があるなら現場監督に言えよ、俺は監督じゃない。まわせ、じい！

高官 停めろ、停めるんだ！

佐藤 なんて！

高官 逆らう奴は敵性民間人とみなす。

佐藤 (手にしたチェーンを投げつけた) うるせえ！ 四の五の言うな。動かすのは俺だ。文句あるなら監督に言え。

高官 (銃を手に) 小僧！

再度、爆発音。一瞬氣をとられた高官。

佐藤 おっす！（手にしたボックスレンチでなぐりかかる）

もみ合う二人。銃声、松本がレバーにつかまりながらくずれる。ドラムが回転する。

松本 何もいい方の足射つことないだろ！（逃げ去る）

佐藤が思わず手にしたガイガー計測器でなぐりつける。高官が頭を抱える様にして立ち上り、そしてうづくまった。遠くでビーという笛の音、ブザーが鳴る。「作業終了」、「片付けろ」の声。現場監督が現われる。

現場監督 作業終了。終りだ、ゴタつく前にすぐ片せ！…何んだどうしたんだ。

佐藤 分んねえよ、何んだか分んねえよ。急に銃で射ちやがったんだこいつ。

現場監督 片せ早く！ 早く片せって言うんだ！

佐藤 いきなり銃をつきつけやがったんだ。こいつ、どうかしてんだ。こいつは、じいさんを射ちやがった。（ぶつぶ

つ言いながら去る）

現場監督、土方、先手達が、あつという間に舞台を片付けると、僅かに格子のパイプが残った。

高官（立ち上る）この建物は核弾頭がバラバラになっているんだ。核弾頭が粉々になって生コンと混じっちゃったんだ。コンクリートの中に粉々になって入ってるんだ。（床と壁に耳を押しあてた）

プラスチック板がまたも現われ、ジャイアント・トック・ステーションのライン上の日本に赤ランプが点滅している。

高官 ほら、聞こえる、聞こえるでしょ。赤ちゃんの笑声とあの運転手の歌う声、そしてもう一つ、ガラガラまわって粉々になった核弾頭の歌だ。ほら、歌ってるぜ、仲良く楽しそうに歌ってるぜ、さあ歌え、メリーゴーランド、まわれ、メリーゴーランド。

どこからかあのメリーゴーランドの音楽が聞えてくる。高官、ドバトとヘリが踊り廻る。——幕

世仁下乃一座のこと

去年の秋、富山市でひらかれた国際アマチュア演劇祭で、はじめてこの劇団の舞台を見た。そのときは世仁下乃一座を「ヨニゲノイチザ」と読むことも知らなかった。

そこで見たのは『別れが辻』という芝居だった。ある銀行の事務センターの浄化槽——つまりトイレよりもっと下にある都市の最下層の空間を舞台に、そこに胎児を捨てたらしい女子事務員がビルの屋上から身をなげようとしている。その大さわぎをよそに浄化槽のなかでは、清掃会社から派遣された四人の男女がいつもの仕事をつづけてい

る。かつての吉原の娼婦。筑豊の炭鉱事故で記憶をうしなった男。ヴェトナム行きLSTの生きのこり。水俣の若い漁夫。芝居の後半ではかれらの過去が歌や踊り入りの寸劇でたどられ、それがおのずから日本の戦後史になっていくという仕組みだ。

かれらの舞台には、演劇にプロもアマチュアもあるものか、おれに必要な芝居はおれがつくるのだという気迫がみなぎっていた。『夕鶴』や『雪女風土記』といったおなじみの顔ぶれにまじって、よもや富山でこんな舞台にぶつかろうとは思ってもいなかったのだから、そのことに私はびっくりした。

残念なのは、この芝居が富山県民会館という金のかかった大ホールで上演されたことだった。東京の劇団だといふから、いつもなら町なかのもっと小さな空間を活動の場に行っているのではあるまいか。たぶんそこの打てばひびくような観客との関係が、いかにも

元気のいいかれらの舞台をさらにもりあげていくといった感じなのだろうな。本当は。そう考えると、その小空間での上演を見たくなった。しばらくして、かれらが新宿のタイニー・アリスというミニ劇場で新しい作品を上演するという話をきいた。さっそく見に行った。それがこの『夕陽のメリーゴーランド』という芝居である。

おもしろかった。ちなみにこの劇団は一九七三年から活動をつづけている。「東京の片隈に自分の手で芝居をつくらせてみたいという単純な理由で発足したのだとか。富山でもらった案内には「座員は男五人、女五人——職業は学校用務員、職人、事務員自動車運転手等々々。他に公演時に協力応援が数人」とあった。機会があったら、いっどぜひ見ておいてくださいな。

（津野海太郎）

編集後記

一月八日。今もつき合ってる大学時代の数少ない友人のひとりのうちへ行って、親が東松山市に住む別の友人の親許で作った白菜を貰って出掛け、ペーコンと白菜のスープ、鶏の丸焼を作る。買ったばかりという電子レンジを使った。中には、じゃが芋とセロリの葉と鶏のひき肉と松の実とレーズンとアーモンドを入れた。

二十三日。今年一年、編集の仕事で津野さんから引き継ぐ編集会議をうちで開いた。白魚とワカメのスタは、ワカメを水に戻す時間が足りなくて失敗。サバの身をそいで、カラアゲにして甘酢あんをかけるのも、身がくずれてうまくいかなかった。韓国のチゲ鍋をマネしたのだけはまずまず。味噌仕立ての辛いブタ鍋で、納豆を入れるのが意表をつくのだが、これがまたオツな味。参加者は、鎌田さん、悠治さん、美恵さん、津野さん、岡さん、志沢さん。

二月二日。昨日、水牛楽団タイから帰国したとの電話。カレーのルらいっぱい手に入れたいという。久し振りに作ろかな。(田川)

(HOT NIGHT CONCERT '84) 極は地獄極楽
ブルースとロックと語り一夜

淡谷のり子・泉谷しげる・愚亭遊佐

記録映画「下北半島」根根次(土本典昭監督・春林舎)
製作費全部の初めコンサートです。

3月8日(木)9日(金)6時開場6時30分開演
日本教育会館一ツ木ホール 前売3000円当日3800円
問い合わせは03(504)1706号/(207)6896号 水牛12まで

*予約購読の申し込みと送金は郵便振替を利用して下さい。
口座番号、水牛編集委員会
口座番号、東京四一九七九二
購読料、一年分三〇〇〇円(送料共)
半年分一八〇〇円です。
*住所、氏名、電話番号、何号からというこ
とを明記してください。
*本誌は次の書店にあります。
模索舎(新宿) ☎三五二一三五五七
ブックイン(阿佐倉) ☎三三三〇一七八九七
信愛書店(西荻窪) ☎三三三〇一四九六一
アール・ヴィヴァン(西武池袋12F)
☎九八一〇一一一内線二九五六
名古屋ウニタ書店 ☎七三一一一三八〇
ワンラブブックス(下北沢)
☎四二一一八三〇二

水牛通信 第六巻第二号
一九八四年二月十日
定価 二〇〇円
発行人 堀田正彦
発行所 水牛編集委員会
〒154 東京都世田谷区新町2-15-3 八巻方
電話〇三(四二五)九六五八
振替口座東京四一九七九二
印刷所 (株)トライプリントショップ